

カント哲学における「非存在言明」の可能性について

「真とみなすこと」の論理分析をてがかりに

繁田歩(早稲田大学)

本発表の目標はカント哲学における非存在言明の可能性とその構造を明らかにすることである。いかんにして「無」について語るか、という哲学的な問いを考察するにあたって、発表者は言語・分析哲学的な方法を採用した。「非存在」の言明可能性を擁護した思想家の代表格としてマイニングが挙げられる。マイニングの議論はラッセルやクワインらによって糾弾されたが、Parsons (1970)¹に代表されるマイニング主義、ならびに矛盾許容論理を採用した Priest (2005)²の非存在主義がマイニングの議論がはらんでいた問題を修正したことで、この理論は今日では一定の地位を有している。発表者の見立てによれば、Priest の理論を利用すれば非存在言明の可能性を理論的に正当化でき、その構造を明確化することができる。したがって本発表はマイニング主義のなかでもとりわけ Priest の理論を参照先とする。

そもそも「非存在言明」というテーマは、我々の直観からすると奇異な事態だと思われるかもしれない。しかし、日常的な言語活動を振り返ってみれば、我々が「非存在対象」を含む様々な対象について言及しているという事実は容易に看取される。ここにいう非存在対象とは、思考上の存在や、抽象的な存在、さらには論理的に不可能な物などなどさまざまな類いの空虚な対象のことである。このような現実存在しない対象についてなされる言語表現は広範に「非存在言明」と呼ばれるものであり、本発表でもこの意味で非存在言明という用語を用いる。

非存在言明をさらに仔細に考察してみれば、このような言明がある動詞によって導かれうるということがわかる。つまり、我々が「神は全能であると信じている」と言明するとき、「信じる」という動詞によってこの言明には特殊な真理性がみとめられる。この命題で動詞を「知っている」に変更すればその真理性も変化することは認識論の観点からよく知られている。これらの動詞は、ある対象に向けられた主観の心的状態として理解される。このような心が対象に向けられてあること(志向性)をあらわす動詞は、ブレンターノやマイニングらといった初期現象学に由来するマイニング主義において一般に「志向性動詞」と呼ばれるものである(これらの動詞で表現される態度は発話行為論で「命題的態度」として広範に議論されているものである。なお今回は「志向性動詞」としてこの動詞を扱うが、このことがカントの現象学的解釈を意図するものではないということは発表にてしめされるとおりである)。

カントはそれらの動詞を区別することの重要性について、『純粋理性批判』(KrV と略記)の方法論(A820/B848-A831/B859)、イエシエが編纂した『論理学』(AA. IX)、さらには批判期にあたる 1786 年の論考「思考の方向を定めるとはどういうことか」(WDO と略記, AA. VIII 131-147)で複数回にわたって言及している。カントは「真とみなすこと Fürwahrhalten」を「思う meinen」、「信じる glauben」、「知る wissen」の三つの様態に分類し、それぞれの言明の真理性を論じている。これらの動詞は、空虚な名辞を含む文ないし節を補部にとることができ、かつ真理性を有する。このような観点からであればカントの議論を今日の志向性動詞の議論から再検討することは正当である。したがって、本発表では、「真とみなすこと」の議論を手がかりとして、志向性動詞を伴って表現される非存在言明の構造を検討する。

現代の分析哲学における注目とは対照的に、非存在言明とい

うテーマはこれまでのカント研究においてほとんど論じられてこなかった。しかし、このテーマはカント研究にとっても重要な論点である。なぜなら、非存在対象に関して言及する論理的な素地がまったく存在しないならば、カント実践哲学は重大な欠陥を抱えることとなるからである。そもそも、当為命題において表象される対象は存在せず、反事実的な事柄でありうる、ということは容易に想像できよう。というのも、もし「～すべき」という実践的な命題において命じられている事がつねにすでに実現しているならば、この命法は論理的に無意味なものになってしまうからである。

さらに、カントにとって、「神」に代表される理念の対象について思考する可能性を確保しておくことは実践理性の必然的な「要請」でもある。つまり、現存在を例証できない対象について考える可能性をみとめること、すなわち「純粋な理性信仰」はカントの議論によれば「普通の、しかし(道徳的に)健全な理性をもった人間が理論的見地と実践的見地において、自分の使命の全目的に完全に適合しながら自分の道をあらかじめ示しうるための道標であり羅針盤」としての意義を有するものである(Vgl. AA. VIII 142)。そして、「もしこの信仰が動揺するなら私[カント]の倫理的原理そのものが転覆させられるであろう」(A828/B857)とカントが述べるように、非存在言明の可能性という問題はカント哲学の体系にとって軽視すべからざる問題なのである。

なお本発表が着眼する「真とみなすこと」というテーマに関する先行研究は少なくない。しかし、これらの研究はカントの概念区分をいかに整合的に理解するかを目指したものが多く、しかし 2000 年代以降になると、Chignell (2007a, 2007b)³、Pasternack (2011, 2014)⁴、Höwing (2015, 2016, 2017)⁵らが「真とみなすこと」を宗教論との関係から検討しており、例えば Pasternack はカントによる命題的態度の分類という観点から「真とみなすこと」を考察している。今回は比較的新しく、これまでの議論を総括している Höwing (2016) の研究を最新の研究成果として参照する。また、主要なテキストとなるのは KrV の方法論の議論だけではなく、「真とみなすこと」の『論理学』で取り扱いにも視野を広げる。また、「真とみなすこと」の諸様態を単独で論じた WDO の議論はとくに注目にあたいる。WDO において「思考を方向づける」という我々の能力がカント独自の志向的態度を示すものであるということを確認することは、本発表の目的にとって不可欠の課題となる。このようにして、本発表ではこれまでの研究とはまったく異なる切り口からカントの「真とみなすこと」に着眼することで、志向性動詞を伴う「非存在言明」の可能性と構造を分析し、非存在言明の認識論的・論理的な意義を明確化することを目標とする。

¹ Parsons (1970): *Nonexistent Objects*.

² Priest (2005): *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*.

³ Chignell (2007a): "Kant's Concepts of Justification".
Chignell (2007b): "Belief in Kant".

⁴ Pasternack (2011): "The Development and Scope of Kantian Belief: The Highest Good, The Practical Postulates and The Fact of Reason".

Pasternack (2014): "Kant on Opinion: Assent, Hypothesis, and the Norms of General Applied Logic".

⁵ Höwing (2015): "Zur Vollständigkeit von Kants Unterscheidung zwischen Meinen, Glauben und Wissen".

Höwing (2016): "Kant on Opinion, Belief, and Knowledge".

Höwing (2017): "Kant über Wissen, Allgemeingültigkeit und Wahrheit".